

平成 22 年 5 月 27 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520177

研究課題名（和文） 上代文学における墓の表現性についての基礎的研究

研究課題名（英文） A Study of Graves in Japanese Ancient Literature

研究代表者

廣川 晶輝（HIROKAWA AKITERU）

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：40312326

研究成果の概要（和文）：

本研究は、日本文学史において、○『万葉集』（高橋虫麻呂歌・田辺福麻呂歌・大伴家持歌の3作品）、○『大和物語』第147段「生田川」、○観阿弥作謡曲「求塚」、○森鷗外作戯曲「生田川」、というように上代から近代にかけて長く作品化された「菟原娘子伝説」の初発の位置にある『万葉集』の作品の表現を分析し、「墓」が作品の中の〈場所〉として選ばれていることの意義を追究している。その結果、

- ① 「墓」という〈場所〉には死者への「偲ひ」の時間が堆積していること。
- ② 墓の中に眠る人物と第三者の関係にある「作品の中の我れ」も、この堆積に立ち会うことで「偲ひ」に参加できるようになる機制があること、つまり、「墓」という〈場所〉が、「偲ひ」の回路を開き得ているということ。
- ③ 「墓」とは、肉親（やそれに準じる親しい人物）を偲ぶ「よすが」となるものだが、第三者に対しての顕示・アピールの機能をも含み持つということ。

などを明らかにした。

この研究成果を、2008年5月、新典社（東京都千代田区神田神保町）より、『死してなお求める恋心―「菟原娘子伝説」をめぐって―』と題して刊行した。この著書は、新書である分、一般社会人や生涯教育を志す人々など多くの国民に解りやすい表現にすることに努めた。この点、科学研究費補助金交付の成果の、国民への開示・説明のはたらきを、十分に果たし得ているものである。

また、この研究成果を、平成21(2009)年4月、「墓を歌うということ」と題して、『国文学 解釈と教材の研究』（学燈社）54巻6号（4月臨時増刊号）誌上において公表した。この公表した媒体は高等学校教諭が教材研究のために使用する学術誌であり、また、大学生や生涯教育を志す一般読者が教養を深めるために読む学術誌である。このような媒体に研究成果を公表できたことも、科学研究費補助金交付の成果の、国民への開示・説明のはたらきを、十分に果たし得ているものである。

研究成果の概要（英文）：

The Unai Maiden Grave Legend is very famous in Japanese literature. This Legend became many literary works: *Man' yosyu*, *Yamatomonogatari*, *Motomezuka* by Zeami, *Ikutagawa* by Mori Ogai. I mainly studied about the Unai Maiden Grave Poems in *Man' yosyu*.

I have defined about the Grave's literary points in Japanese Ancient Literature. The Grave opens a way. That is to say, in front of the Grave, someone who don't have a connection to the dead person in the Grave, can think about the dead person.

I issued a book and some theses about my studies, in 2008 and 2009. This book and theses play important parts in showing my studies to many people.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	100,000	30,000	130,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：菟原娘子伝説、万葉集、高橋虫麻呂、田辺福麻呂、大伴家持

1. 研究開始当初の背景

(1) 新しい〈日本文学史〉を構想するために
 これまでの「日本文学史」が創り上げられて来た時代的・社会的状況についての研究が進んだ現在、イデオロギーの「刷り込み」が諸制度・諸機関によって作為的になされたことが明らかにされている。このように、従来の「日本文学史」に対して自己批評的な見直しが求められている現在の学術的状況において、私たち研究者に求められているのは、どのようにすれば新しい〈日本文学史〉を構想することが可能であるかを考え、そして、それを体現し得る方法を構築することである。国際化が叫ばれる昨今、国際シンポジウムなどにおいて、自国の文化を形作る日本文学の歴史についての説明が求められる。その要望に応えることができる、新しい〈日本文学史〉を構想し得る新しい〈方法〉を構築することが、まさしく急務の課題となっていると判断される。

(2) 着想に至った経緯

上記認識に基づく本研究は、「同一題材の利用を分析することをとおしての新しい〈日本文学史〉の構築」を標榜する。いくつかの作品が共通の題材を用いることを志向し、それぞれの作品自体が関連を主張する時、そこに、ひとつの〈線〉すなわち、ひとつの〈日本文学史〉を構想することが可能であると考えられるからである。

2. 研究の目的

(1) 同一題材の利用

本研究が、その同一題材の利用の例として分析したのは、「菟原娘子（うないおとめ）伝説」である。菟原娘子に求婚した二人の壮士が争い、結局、娘子と二人の壮士との三人が死を選んで行った。こうした「菟原娘子伝説」を同一題材として扱っている日本文学に

おける作品は、次のとおりである。

- 『万葉集』（高橋虫麻呂歌・田辺福麻呂歌・大伴家持歌の3作品）
- 『大和物語』第147段「生田川」
- 観阿弥作、謡曲「求塚」
- 森鷗外作、戯曲「生田川」

このように、「菟原娘子伝説」には、上代から、中古、中世、そして近代にかけての息の長い利用のされ方があるのであり、射程の長い立論が可能となる。上に、国際化の現代における急務の課題と指摘したが、その国際化に適い、その国際化に耐え得るためには、このような射程の長い立論が求められるであろう。国際シンポジウムなどにおいて、自国の文化（文学）の中に射程の長い〈日本文学史〉の存在を説明できることは、国際社会からの日本文化の理解に大きく寄与する。

3. 研究の方法

(1) 実地踏査の重要性

『万葉集』の「菟原娘子伝説歌」を「墓」に注目して考察し、「墓との出会いの衝撃が強かった」と指摘する先行研究に、大久保廣行氏「墓との出会い—伝説歌の底流—」（『筑紫文学圏と高橋虫麻呂』、2006年2月、笠間書院。初出「墓との出会い—虫麻呂伝説歌の底流と手法—」『文学論藻』77、2003年3月）がある。大久保論文は考古学の知見を取り入れ、また、大久保著書収載の他の論考も考古学の諸資料の存在を我々に教えている。本研究は、大久保氏が触れていない考古学の論考および発掘調査報告を取り上げた。吉本昌弘氏「摂津国八部・菟原両郡の古代山陽道と条里制」（『人文地理』33-4、1981年8月）は、「条里型土地割施行の基準線となった」「駅路」の「屈折」を分析し、「律令時代の地域計画」を明らかにしようとする論考であり、駅路すなわち古代山陽道の位置を推定する。

近年、吉本論文の妥当性は、その推定古代山陽道の線上にある「深江北町遺跡」(神戸市東灘区)から、「驛」と書かれた墨書土器が出土したことから保証された。『古代のメインロード—山陽道沿線物語—』(2001年7月、神戸市教育委員会文化財課)では、底部外面に「驛」と書かれた墨書土器(須恵器稜碗)の鮮明なカラー写真が載せられており、「当遺跡が『葦屋駅』の位置を示すことを明確に表現するものと考えられる」と指摘されている。なお、同じく「驛」と書かれた別の墨書土器の鮮明なカラー写真を、『深江北町遺跡第9次 埋蔵文化財発掘調査報告書—葦屋驛家関連遺跡の調査—』(2002年3月、神戸市教育委員会文化財課)でも確認できる。また、森浩一氏「菟原処女の墓と敏馬の浦」(同氏編『万葉集の考古学』、1984年7月、筑摩書房)は、「海に前方部を向けた中央の処女塚古墳にたいして、東方の東求女塚(ひがしもとめ)古墳と西方の西求女塚古墳が共に前方部を向けている。あたかも中央の一基を、前方部を向けあった二基の古墳が挟むような状況になっている」点と、「瀬戸内航路を意識した位置に造営されていて、海からの目印のような造形物である」点とを勘案し、菟原娘子伝説が、「古くから存していた古墳に後になって附会された」ことを指摘している。この指摘は近年、『西求女塚古墳 発掘調査報告書』(2004年3月、神戸市教育委員会文化財課)によって補強された。

こう見て来る時、陸路にしる、海路にしる、大久保論文の指摘する「墓との出会いの衝撃」の大きさを確認することができようし、『万葉集』に、墓の状態が詳細に描かれていることの必然性を辿ることもできよう。この点に鑑み、処女塚(神戸市東灘区)、東求女塚(同)、西求女塚(神戸市灘区)への実地踏査および調査が必要であると考えた。

(2) 〈墓〉の表現性の分析

『万葉集』、『大和物語』、謡曲「求塚」では、「墓」が、作品上のまたは作品の展開に関わる重要な〈場所〉となっている(森鷗外の戯曲で演じられるのは、菟原娘子の自殺という「死」の「点」よりも前であり、死に至る娘子の心理の描写に力が注がれている。そのため、死後の「墓」は登場しない)。本研究は、文学作品の中へと位置付けられた、この「墓」の表現性を分析しようとする点で、特異な研究である。

本研究は、「菟原娘子伝説」が時代を超えて数々の作品として生まれ出ることができたこと、いわば「菟原娘子伝説の多産性」の「鍵」を、この「墓」という「場所」が持つ表現性が握っているのではないかと考えた。そして、このような視点に立ち、この「菟原娘子伝説」の初発の位置にある『万葉集』の作品の表現を分析した。『万葉集』の「菟原

娘子伝説歌」で「墓」が作品の中の〈場所〉として選ばれていることによって、どのような表現のあり方が開かれているのか、どのような「偲ひ」の表現が開かれているのか、それを追究したのである。

その具体的分析方法について、以下に示す。

〈墓〉の機能	具 体 例
肉親(やそれに準じる親しい人物)を偲ぶ「よすが」	○昔こそ 外にも見しか 我妹子が 奥柳(おくつき)と思へば はしき佐保山(『万葉集』卷3・四七四) ○白鳥を獲て陵域の池に養はむ。因りて、其の鳥を親つつ 顧情を慰めむ(『日本書紀』仲哀天皇) ○彼の忠信を詠(しの)ひ、雷の落ちし同じ處に彼の墓を作りたまひ(『日本霊異記』雷を捉ふる縁)
第三者(他者)に対するの顕示・アピール・デモンストレーション	○大伴の 遠つ神祖の 於久都奇は しるく標立て 人の知るべく(『万葉集』卷18・四〇九六) ○碑文の柱を樹てて言はく「生きても死にても雷を捕へし 栖輕が墓」といふ。(『日本霊異記』同上) 以下、当該「菟原娘子伝説歌」 ○〔高橋虫麻呂歌〕長き代に標にせむと 遠き代に 語り継がむと 娘子墓 中に造り置き 壮士墓このもかものもに造り置ける ○〔田辺福麻呂歌〕長き世の語りにしつつ 後人の 偲ひにせむと 玉梓の 道の辺近く 岩構へ 作れる冢を ○〔大伴家持歌〕奥墓を ここと定めて 後の世の 聞き継ぐ人も いや遠に 偲ひにせよと

「第三者」によって 現在まで 語り継ぎ・言い継がれて来た 「偲ひ」	〔田辺福麻呂歌〕この道を行く人ごとに 行き寄りて い立ち嘆かひ ある人は 哭にも泣きつつ 語り継ぎ 偲ひ継ぎくる 〔大伴家持歌〕いにしへにありけるわざの くすばしき事と言ひ継ぐ
-----------------------------------	---

4. 研究成果

(1) 主たる研究成果

上記研究方法に則って得た結果は次のとおりである。

- 「墓」という〈場所〉には死者への「偲ひ」の時間が堆積していること。
- 墓の中に眠る人物と第三者の関係にある「作品の中の我れ」も、この堆積に立ち会うことで「偲ひ」に参加できるようになる機制があること、つまり、「墓」という〈場所〉が、「偲ひ」の回路を開き得ているということ。
- 「墓」とは、肉親（やそれに準じる親しい人物）を偲ぶ「やすが」となるものだが、第三者に対しての顕示・アピールの機能をも含み持つということ。

これらの明瞭な研究成果を、2008年5月、新典社（東京都千代田区神田神保町）より、『死してなお求める恋心―「菟原娘子伝説」をめぐって―』と題して刊行した。この著書は、新書である分、一般社会人や生涯教育を志す人々など多くの国民に解りやすい表現にすることに努めた。この点、科学研究費補助金交付の成果の、国民への開示・説明のはたらきを、十分に果たし得ているものである。また、この研究成果を、平成21(2009)年4月、「墓を歌うということ」と題して、『国文学解釈と教材の研究』（学燈社）54巻6号(4月臨時増刊号)誌上において公表した。この公表した媒体は高等学校教諭が教材研究のために使用する学術誌であり、また、大学生や生涯教育を志す一般読者が教養を深めるために読む学術誌である。このような媒体に研究成果を公表できたことも、科学研究費補助金交付の成果の、国民への開示・説明のはたらきを、十分に果たし得ているものである。

(2) 国民への成果の還元

研究代表者廣川晶輝の勤務する甲南大学は、「菟原娘子伝説」に登場する処女塚・東求女塚・西求女塚が存在している神戸市にある。この点、「地域社会」に対して本研究の成果を発信することが可能であり、つまり、科学研究費補助金交付の有効性を社会に対して発信することができる絶好の機会を持ち得ているわけである。

研究代表者廣川晶輝は、神戸市教育委員会・神戸市総合インフォメーションセンターとの連携をはかって来た。その連携の中で、廣川晶輝は、菟原娘子伝説に関連するある碑文の存在について、神戸市総合インフォメーションセンターに対して、助言・教示することができた。一般市民に対して説明する働きを帯びているはずの神戸市総合インフォメーションセンターが把握していなかった碑文の存在について助言・教示できたことは、国民への情報提示において実際に役立ったこととなる。これは、科学研究費補助金交付の

有効性を社会に対して発信することができた最たる例であり、科学研究費補助金交付による成果の国民への大きな還元となった次第である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計10件)

- ① 廣川晶輝、ふたりの壮士―高橋虫麻呂「菟原娘子伝説歌」をめぐって―、日本文学、査読有、59巻6号、2010、(2010年5月現在印刷中につき、ページ番号不明。ただし、総8ページ分)
- ② 廣川晶輝、山上憶良「哀世間難住歌」について―序文と長歌との関連を中心に―、甲南大學紀要文学編、査読無、160号、2010、pp. 7-14
- ③ 廣川晶輝、大伴旅人「歌詞両首」について、国語国文研究(北海道大学国語国文学会、査読有、136号、2009、pp. 26-42)
- ④ 廣川晶輝、大伴家持防人同情長歌作品について、美夫君志会編『万葉集の今を考える』(新典社)、査読有、2009、pp. 299-312
- ⑤ 廣川晶輝、墓を歌うということ、国文学解釈と教材の研究(学燈社)、査読無、54巻6号(4月臨時増刊号)、2009、pp. 139-145頁
- ⑥ 廣川晶輝、山上憶良「思子等歌」の「瓜食めば子ども思ほゆ 栗食めばまして偲はゆ」について、甲南大學紀要文学編日本語日本文学特集、査読無、158号、2009、pp. 1-10
- ⑦ 廣川晶輝、山上憶良「令反或情歌」の「畏俗先生」について、甲南大學紀要文学編日本語日本文学特集、査読無、153号、2008、pp. 1-10
- ⑧ 廣川晶輝、山上憶良「令反或情歌」について、美夫君志(美夫君志会)、査読有、75号、2007、pp. 47-61
- ⑨ 廣川晶輝、書記テキストとしての磐姫皇后歌群、上代文学会研究叢書『初期万葉論』(笠間書院)、査読有、2007、pp. 89-143
- ⑩ 廣川晶輝、鑑賞明日香関係歌、明日香風(飛鳥保存財団)、査読有、102号、2007、pp. 16-21

[学会発表] (計5件)

- ① 廣川晶輝、山上憶良「哀世間難住歌」について、美夫君志会(平成22年度5月例会)、2010年5月9日、中京大学
- ② 廣川晶輝、「取りつつき」考―高橋虫麻呂「菟原娘子伝説歌」を中心に―、第43回万葉文化学会、2010年2月27日、坂出市万葉会館
- ③ 廣川晶輝、大伴家持防人同情歌群について

て、美夫君志会特別例会「家持作品の〈時空間〉をさぐる」、2009年3月8日、中京大学

- ④ 廣川晶輝、山上憶良「思子等歌」について、萬葉学会（第61回全国大会）、2008年10月19日、皇學館大学
- ⑤ 廣川晶輝、「令反或情歌」について、美夫君志会美夫君志万葉ゼミナール「山上憶良の諸問題」、2007年9月8日、かう楽

〔図書〕（計2件）

- ① 廣川晶輝、新典社、死してなお求める恋心―「菟原娘子伝説」をめぐって―、2008、160、ISBN978-4-7879-6108-2
- ② 村田右富実、廣川晶輝、大阪府立大学（文部科学省 現代的教育ニーズ取組支援プログラム「地域学による地域活性化と高度人材養成」）・大阪公立大学共同出版会、南大阪の万葉学、2007、80（およびCD-ROM1枚）ISBN978-4-901409-36-0

6. 研究組織

(1) 研究代表者

廣川 晶輝 (HIROKAWA AKITERU)
甲南大学・文学部・教授
研究者番号：40312326

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：